

甥の家庭教師は、人妻の私の前でだけ大人になる 一夫の留守の家、二人きりの夜の秘めごと一

甥の受験を支える年下の家庭教師。子ども扱いしていたはずの青年が、夫に顧みられない人妻の前でだけ、別人のように男の顔を見せていく、留守宅の背徳純愛

夜更け文庫／夜野しずく

本作品はフィクションです。登場人物はすべて18歳以上の成人であり、実在の人物・団体とは一切関係ありません。

プロローグ

桐生家を知る人は、みんな桐生麻衣子きりゆう まい こを「できた奥さん」
だと言う。

甥の受験を一年だけ引き受け、夫の留守がちな家を一人で
できりもりし、訪ねてくれば品よくお茶を出してくれる、
隙のない人妻。近所の主婦の輪のなかでも、いつも一歩引
いた穏やかさを崩さない。

——その人が今、俺の腕のなかで、まるで別人みたいに
息を乱している。

夜のとろみが、間接照明だけの居間に満ちていた。テレ
ビも消え、時計の針の音だけが、やけにはっきりと聞こえ
る。家じゅうの灯りを落としたこの部屋に、二人のほかには
誰もいない。夫は数日帰らず、甥の悠斗も模試の合宿で
家を空けている。広い家のなかで、ここだけが熱を持っ
ていた。

昼間の麻衣子を思い浮かべる。エプロンの紐を結びなが
ら玄関に出てきて、「結城先生、いつもありがとうございます
す」と柔らかに頭を下げる。受験生の甥のために、夜食の
差し入れをそっと机の端に置いていく。来客があれば茶を

淹れ、町内の誰にでも丁寧に会釈する。誰もが「しっかりした奥さんね」と口を揃える、あの完璧な^{たたず}佇まい。

壁の向こうの世界では、誰も、この夜のことを知らない。近所の主婦たちも、彼女の夫も、海外にいる姉夫婦も。みんなが信じている「できた奥さん」が、今、年下の家庭教師の腕のなかで、なにもかもをほどいていることを。それでいい、と青は思う。この夜は、二人だけのものだ。

その同じ唇が、今は俺の名前だけを、溶けるように呼んでいる。

「……青くん」

ゆるく巻いた栗色の髪が、白い首筋に幾筋も乱れて貼りついていて。いつもは穏やかに伏せられている目もとが、今は潤んで、すがるようにこちらを見上げてくる。左手の薬指で、細い指輪が間接照明をにぶく弾く。その光だけが、俺たちのしていることの後ろめたさを、静かに思い出させた。

九つも年下の俺を、この人はずっと弟みたいに扱ってきた。「青くんはまだ子どもね」「ちゃんと食べてる？」——家庭教師として雇われたその日から、世話を焼かれてばかりだった。来客には品よく頭を下げ、甥の受験を一人で支

え、夫の留守を埋めるように、誰にでも丁寧で、隙のない奥さん。それが、世間の知る桐生麻衣子だった。

その完璧な仮面が、今、俺の手のなかで、音もなく剥がれ落ちていく。

それなのに、今この部屋では、俺だけが彼女の手綱を握っている。子ども扱いされていたはずの俺の前で、麻衣子はもう、なにひとつ取り繕えずにいる。



——ここから先は製品版でお楽しみください——